

[博士論文審査要旨]

申請者：Shin Hayoung

論文題目 「組織成員の向社会的モチベーション:自己決定理論における動機の統制的側面の観点から」

審査員 島貫 智行
佐々木 将人
坪山 雄樹

本論文は、組織行動論における向社会的モチベーション (prosocial motivation) の統制的側面が組織成員の心理・行動に与える影響について検討した研究成果である。向社会的モチベーションとは「他者に恩恵を与えようとする意欲」を意味し、先行研究では成員間の協働促進や生産性・創造性の向上などの好影響をもたらすという知見が蓄積されてきた。しかし近年、向社会的モチベーションが成員の自己犠牲や過度な負担感を通じて成員本人や組織に悪影響を及ぼす可能性が指摘されている。

これに対して本論文は、向社会的モチベーションの理論的基盤である自己決定理論に立ち返り、向社会的モチベーションには価値や意味を見出し自律的に動機づけられる状態を意味する自律的側面と、義務感や罪悪感、羞恥心などによって統制的に動機づけられる状態を指す統制的側面があることを指摘し、統制的側面により動機づけられた場合に悪影響が生じる可能性があることを主張する。向社会的モチベーションの自律的側面と統制的側面の双方を考慮した測定尺度を用いて、日本企業の従業員を対象とした質問票調査のデータを分析した結果、自律的側面は従業員の主観的バイタリティを高め情緒的消耗感を低めるのに対して、統制的側面は情緒的消耗感を高めることが示された。また、自律的側面は従業員の知識共有行動を促進し知識隠蔽行動を抑制するのに対して、統制的側面は知識隠蔽行動を促進することが示された。さらに、本論文は統制的側面の先行要因として、既存研究をふまえて職務特性や関係性欲求などの観点から検討を加えている。

本研究の貢献は、まず向社会的モチベーション概念に自律的側面に加えて統制的側面があることを理論的に再検討し、両側面が弁別可能であることを経験的に示したことである。また、向社会的モチベーションにより組織成員の心理・行動に悪影響が生じる背景として、自己犠牲や過度な負担感のほかにも統制感があることを新たに示したことである。さらに、自律的側面と統制的側面が成員の心理・行動に異なる影響を与えるという知見も、向社会的モチベーション研究に対する重要な貢献といえる。

ただし、本研究には課題もある。例えば、向社会的モチベーションの統制的側面に関する概念の明確化や成員の心理・行動に悪影響をもたらすメカニズムについてのより深い考察である。また、自己犠牲や過度な負担感による悪影響と統制感による悪影響を識別した検討も必要である。モチベーションの強度のみならず持続性に関する検討やモチベーションの先行要因に関する更なる検討も望まれる。しかし、これらは向社会的モチベーション研究の今後の展開可能性を示したものであり、本論文の価値を損なうものではない。

よって、審査員一同は、所定の試験結果をあわせ考慮して、本論文の筆者が一橋大学学位規則第5条第1項の規定により一橋大学博士(商学)の学位を受けるに値するものと判断する。